

水稲複合抵抗性品種「彩のかがやき」を核にした環境負荷低減型のIPM栽培

埼玉県において病害虫複合抵抗性品種「彩のかがやき」を核にして、温湯消毒、肥効調節型肥料の苗箱施用（苗箱まかせ）、ケイ酸資材（イネルギー）、要防除水準に基づいた化学的防除を組合せることで、水稲IPMの概念の活用による減農薬、減化学肥料栽培ができます。

【予防的措置】病害虫・雑草の発生しにくい環境の整備



いもち病、縞葉枯病、ツマグロヨコバイ抵抗性

複合抵抗性品種：「彩のかがやき」



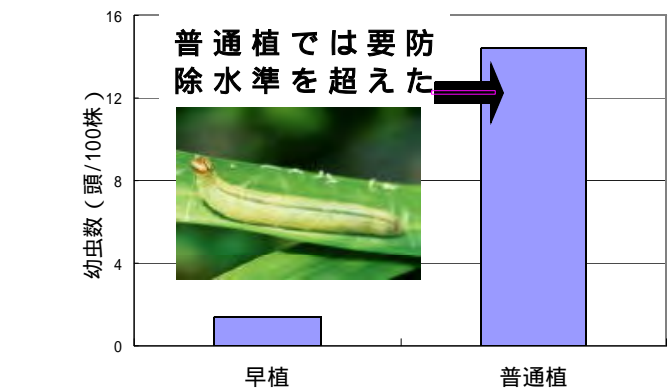
ケイ酸資材（イネルギー）で稲体強化
緩効性肥料の苗箱施用で窒素質肥料の削減

耕種的対策



いもち病、ばか苗病、もみ枯細菌病
イネシンガレセンチュウに有効

物理的手法による種子消毒：
温湯消毒（60℃ 10～15分）



作期によるイモンジセリ発生量の相違
発生予察と要防除水準に基づく適正防除

【判断】

防除要否及びタイミングの判断
予察情報の活用、ほ場観察

ポイント【経済的判断】
要防除水準の活用

【防除】

防除の方法 農薬による防除等

要防除水準

紋枯病：幼穂形成～穂ばらみ期の発病株率 15～20%
イネミズゾウムシ：移植10日後の成虫数 0.3頭/株
ニカメイチュウ：第一世代幼虫期の葉鞘変色茎率 5%
ツマグロヨコバイ：出穂期前後の成幼虫数 30頭/株
イチモンジセリ：若齢期の幼虫数 5頭/100株など